



TITLE:

非線形固有値問題に対する変分的方法についての一注意 (応用科学における偏微分方程式と数値解析)

AUTHOR(S):

海津, 聡

CITATION:

海津, 聡. 非線形固有値問題に対する変分的方法についての一注意 (応用科学における偏微分方程式と数値解析). 数理解析研究所講究録 1982, 462: 58-71

ISSUE DATE:

1982-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/103151>

RIGHT:

非線形固有値問題に対する変分的方法についての一注意、

電気通信大学 海津 聡

§ 1. ま え が き. 本稿では, $\varphi_n (n \in \mathbb{N}_0 = \{0\} \cup \mathbb{N})$ は無限次元実可分ヒルベルト空間 H 上の下半連続、偶かつ凸関数で、 $\varphi_n \neq \infty$ とする. φ_n の劣微分に関する固有値問題 $E_n^* : \partial \varphi_n^-(v) \ni \lambda v, |v| = R (> 0), n \in \mathbb{N}_0$, を考えよう. φ_n のある条件のもとで E_n^* は可算無限個の解をもつ (P. Clément [2]). E_n^* の解の一部をある方法 (§ 2, 定義参照) を用いて, genus k で、整列化し, $\{v_k^n, u_k^n\}_{k \in \mathbb{N}}$ であらわす. $\{v_k^n, u_k^n\}, v_k^n$ をそれぞれ, E_n^* の第 k 解, 固有値第 k と呼ぼう (§ 2, 定義). 本稿では $\varphi_n \nearrow \varphi_0$ (又は, $\varphi_n \searrow \varphi_0$), $n \nearrow \infty$ なる仮定のもとで, 番号 k が不変に保たれることを示す. 詳しくは, (i) 第 k 解の任意の部分列 $\{v_k^{n_j}, u_k^{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}} (\subset \mathbb{R} \times H)$ は収束部分列をもつ. (ii) 第 k 解の任意の収束部分列の極限 $\{v_k^0, u_k^0\}$ は E_0^* の第 k 解である. (iii) 特に E_0^* が線形問題のとき, $\{v_k^0\}_{k \in \mathbb{N}}$ は E_0^* の全ての固有値を大小順に重複をこめて整列化したものに一致し, 部分列をとら

すに、 $v_k^0 = \lim_{n \rightarrow \infty} v_k^n$ がなりたつことが示される。

φ_n について、単調収束より弱い収束： $\varphi_n \rightarrow \varphi_0$ (Mosco), $n \rightarrow \infty$ (φ_n は φ_0 に Mosco の意味で収束する), のもとで、問題 $E_n: \partial \varphi_n(u) \ni \mu u, |u| = R$ の第 k 解の列 $\{v_k^n, u_k^n\}_{k \in \mathbb{N}} (\subset \mathbb{R} \times H)$ は収束部分列をもつ、さらに、第 k 解の任意の収束部分列の極限 $\{\mu^0, u^0\}$ は E_0 の解である (西山 [5])。しかし、 E_0 の第 k 解であるかについては不明である。西山 ([5]) の結果は、 \mathbb{R}^n の有界領域 Ω で定義されたある種の非線形固有値問題の有限要素法の処罰法による近似解の収束性、および、同種の固有値問題の解 $\{\mu^n, u^n\}$ の領域 Ω に関する連続性の基礎となる。

本稿は西山明成氏との共同研究の報告である。

genus について復習する。 $\Sigma = \{\Gamma \subset H \setminus \{0\} : \Gamma \text{ は閉かつ対称}\}$ とおく。 $\text{genus } \gamma : \Sigma \rightarrow \mathbb{N}_0 \cup \{\infty\}$, $\gamma(\Gamma) = \inf \{n \in \mathbb{N} : g \in C(\Gamma, \mathbb{R}^n \setminus \{0\}), g(x) = -g(-x)\}$ とおく、ただし、 $\inf \emptyset = \infty, \gamma(\emptyset) = 0$ とおく。
 $B^R = \{x \in H : |x| \leq R\}$, $\gamma_k^R = \{\Gamma \subset \partial B^R : \Gamma \subset \Sigma, \text{コンパクト}, \gamma(\Gamma) \geq k\}$ とおく。凸関数 φ_n の conjugate function φ_n^* は、 $\varphi_n^*(x) = \sup_{y \in H} \{ \langle x, y \rangle - \varphi_n(y) \}$ で定義される。このとき、 $\partial \varphi_n^* = \partial \varphi_n^{-1}$ である。
 φ_n^* の ∂B^R 上の臨界値の候補 C_k^n を次式で定義する。

$$C_k^n = \sup_{\Gamma \in \gamma_k^R} \inf_{\Gamma \ni x} \varphi_n^*(x).$$

実際に φ_n^* が C^1 級である条件をみたせば、 C_k^n は、 $\varphi_n^*|_{\partial B^R}$ の臨界値で対応臨界点は E_n^* の解である (P.H. Rabinowitz [6])。又、

φ_n^* が C^1 級でなくとも, φ_n^* がある条件をみたす凸関数であれば C_n^* は, $\varphi_n^*|_{\partial BR}$ の (劣微分の接平面微分が零になる意味で) 臨界値に対する臨界点は E_n^* の解である (P. Clément [2]). 本稿では, $\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}_0}$ に対してつぎの条件 A_1 , 又は, A_2 を仮定する.

A_1 : (a) $\varphi_1(0) = 0$, かつ, $\partial \varphi_1(0) = 0$.

(b) 任意非負数 λ に対して, $\varphi_0^{-1}(-\infty, \lambda]$ はコンパクトである.

(c) $\lim_{x \in D(\varphi_0), |x| \rightarrow \infty} \varphi_0(x)/|x| = \infty$.

(d) $\varphi_n \searrow \varphi_0, n \nearrow \infty$.

A_2 : (a) $\varphi_0(0) = 0$, かつ, $\partial \varphi_0(0) = 0$.

(b) 任意非負数 λ に対して, $\varphi_1^{-1}(-\infty, \lambda]$ はコンパクトである.

(c) $\lim_{x \in D(\varphi_1), |x| \rightarrow \infty} \varphi_1(x)/|x| = \infty$.

(d) $\varphi_n \nearrow \varphi_0, n \nearrow \infty$.

§ 2. 結果.

条件 A_1 , 又は, A_2 を $\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}_0}$ がみたすとき, $\{C_n^*\}_{n \in \mathbb{N}}$ は φ_n^* の臨界値全集合の部分集合で可算無限濃度をもつ ($n \in \mathbb{N}_0$). 実際, $C_n^* > 0$, かつ, $\lim_{n \rightarrow \infty} C_n^* = 0$, が示される. $\{C_n^*\}_{n \in \mathbb{N}}$ を用いて E_n^* の解の一部を整列化する.

定義 1 任意に $R (> 0)$, $n_0 (\in \mathbb{N}_0)$ を固定する. $k (\in \mathbb{N})$ に対し

$\{v, u\}$ が E_n^* の第 k 解であるとは、(i) $\partial \varphi_n^*(v) \ni v, \|v\| = R$, (ii) $\varphi_n^*(v) = c_k^n$, をみたすことである。このとき v を E_n^* の固有値第 k と呼ぶ。

注意 臨界値 c_k^n は、 k, R , および n に対して一意に定まり、 R, n を固定すれば、 k の単調減少列であるが、固有値第 k は、一般に多価である。又、 k の単調減少列でもない。しかし、 φ_n^* が $\alpha (\geq 1)$ 次の正斉次性があるときは、固有値第 k, v_k^n は一価で k に関して減少列となる。

定理 1 任意に $R > 0, k \in \mathbb{N}$ を固定する。 $\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}_0}$ が仮定 A_1 , 又は、 A_2 をみたすとき、つぎの (I), (II), (III), が成り立つ。

(I) 任意の $n \in \mathbb{N}_0$ に対し E_n^* の第 k 解 $\{v_k^n, u_k^n\}$ が存在する。

(II) 第 k 解の任意部分列 $\{v_k^{n_j}, u_k^{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$ は $\mathbb{R} \times H$ で収束部分列をもつ。

(III) 第 k 解の任意収束部分列 $\{v_k^{n_j}, u_k^{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$ の極限 $\{v^0, u^0\}$ は E_0^* の第 k 解である。又、次の等式がなりたつ。

$$\varphi_0^*(v^0) = c_k^0 = \lim_{j \rightarrow \infty} \varphi_{n_j}^*(v_k^{n_j}).$$

定理 1 の証明は § 4 でおこなう。

§ 3. 応用.

定理 1 を E_0^* が線形問題となる場合に適用しよう。 H を従前

通りとする. V は H の稠密な線形集合であり、自己ヒルベルト空間とする. $\|\cdot\|_H, (\cdot, \cdot)_H$ は H のノルム, 内積とし, $\|\cdot\|_V, (\cdot, \cdot)_V$ は V のノルム, 内積とする. V から H への injection $i: V \rightarrow H$, はコンパクトであるとする. $D(A) = \{u \in V : \exists c > 0 \text{ s.t. } |(u, v)_V| \leq c \|v\|_H, \forall v \in V\}$ とおく. $A: D(A) \rightarrow H$, を, $(Au, v)_H = (u, v)_V, \forall v \in V$, で定義する. 定義から作用素 A は線形, 単調, $A^{-1}(0) = 0$, かつ, 対称作用素である. $R(A) = H$ より A は自己共役であり, $R(A+I) = H$ から A は極大単調作用素である. 以上から A は cyclically monotone operator となり, 下半連続凸関数 φ_0 があり, $\partial\varphi_0 = A$ である. ここで, $\varphi_0(iv) = |A^{1/2}v|_H^2$ ($v \in V$), $v \notin V$ に対しては, $\varphi_0(v) = \infty$ とおく. ここで $A^{1/2}$ は A の square root であり, $D(A^{1/2}) = V$, $|A^{1/2}v|_H = \|v\|_V$ ($v \in V$) である. φ_0 は, i がコンパクトであるから, $A_1(b)$ 又は $A_2(b)$ をみたす. i の連続性と $|A^{1/2}v|_H = \|v\|_V$ から $A_1(c)$ 又は $A_2(c)$ がなりたつ.

H 上の下半連続, 偶, かつ, 凸関数 $\varphi_\varepsilon: H \rightarrow [0, \infty]$ ($\varphi_\varepsilon \neq \infty$) に対し, 問題 $E_\varepsilon^*: \partial\varphi_\varepsilon^{-1}(v) \ni w, \|w\|_H = R$, を考えよう ($\varepsilon_0 \geq \varepsilon \geq 0$). $\{\varphi_\varepsilon\}_{\varepsilon_0 \geq \varepsilon \geq 0}$ に対し下記の条件 B_1 , 又は, B_2 を仮定する.

B_1 : (i) $\varphi_{\varepsilon_0}(0) = 0$, かつ, $\partial\varphi_{\varepsilon_0}(0) = 0$.

(ii) $\varepsilon_0 \geq \varepsilon_1 > \varepsilon_2 \geq 0$ に対し, $\varphi_{\varepsilon_1}(x) \geq \varphi_{\varepsilon_2}(x), x \in H$.

(iii) $\varphi_0(x) = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \varphi_\varepsilon(x), x \in H$.

B_2 : (I) 非負数 λ に対し, $\varphi_{\varepsilon_0}^{-1}(-\infty, \lambda]$ はコンパクトである.

$$(ii) \lim_{x \in D(\varphi_0), |x| \rightarrow \infty} \varphi_{\varepsilon_0}(x)/|x| = \infty.$$

$$(iii) \varepsilon_0 \geq \varepsilon_1 > \varepsilon_2 \geq 0 \text{ のとき, } \varphi_{\varepsilon_1}(x) \leq \varphi_{\varepsilon_2}(x), x \in H.$$

$$(iv) \varphi_0(x) = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \varphi_{\varepsilon}(x), x \in H.$$

E_{ε}^* の第 k 解、固有値第 k を前節の定義 1 のように与える.

問題 E_0^* の固有値 ν_k^0 は線形コンパクト作用素 iA^{-1} の固有値であるから別の方法で順序づけられる.

定義 2. iA^{-1} の固有値を対応する固有空間の次元だけ重複させ、固有値の大きい値から整列させ $\{\mu_k\}_{k \in \mathbb{N}}$ とおく. μ_k を iA^{-1} の第 k 固有値と呼ぶ.

定理 2. 任意に $R > 0, k \in \mathbb{N}$ を固定する. $\{\varphi_{\varepsilon}\}_{\varepsilon_0 \geq \varepsilon \geq 0}$ が仮定 B_1 または B_2 をみたすとき、つぎの (I), (II), (III) がなりたつ.

(I). 任意の $\varepsilon \in [0, \varepsilon_0]$ に対し E_{ε}^* の第 k 解 $\{\nu_k^{\varepsilon}, \bar{\nu}_k^{\varepsilon}\}$ が存在する.

(II). E_0^* の固有値第 k 、 ν_k^0 と iA^{-1} の第 k 固有値、 μ_k は一致し、

$$\mu_k = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \nu_k^{\varepsilon}.$$

(III). 固有値 μ_k が単純であると仮定する. 第 k 解 $\{\nu_k^{\varepsilon}, \bar{\nu}_k^{\varepsilon}\}_{\varepsilon_0 \geq \varepsilon \geq 0}$

に対し、 $\delta > 0$, E_0^* の第 k 解 $\{\nu_k^0, \bar{\nu}_k^0\}$ が存在して

$(\nu_k^{\varepsilon}, \bar{\nu}_k^{\varepsilon})_H \geq \delta$, であるならば、つぎの等式がなりたつ.

$$\nu_k^0 = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \nu_k^{\varepsilon}.$$

例 1 下半連続、偶かつ凸関数 $\psi: H \rightarrow [0, \infty]$ ($\psi \neq \infty$) は、

$\psi(0) = 0$ かつ $\partial\psi(0) = 0$ をみたすと仮定する. すると E_{ε}^* は、

$$(3.1) \quad (A + \varepsilon \partial\psi)^{-1}(v) \ni \nu v, |v|_H = R$$

となる。ただし、 $\varphi_\varepsilon = \varphi_0 + \varepsilon \psi$, $\varepsilon > 0$ とおく。このとき仮定 B_1 がみたされる。

例1の具体例をあげる。 Ω は滑らかな境界 Γ をもつ \mathbb{R}^n の有界領域

とする。 $H = L^2(\Omega)$, $V = H_0^1(\Omega)$, $(u, v)_H = \int_\Omega uv dx$, $(u, v)_V = \int_\Omega \nabla u \cdot \nabla v dx$ とお

く。下半連続偶かつ凸関数 $g: \mathbb{R} \rightarrow [0, \infty]$ ($g \not\equiv \infty$) を用いて ψ を与える。

$$\psi(u) = \begin{cases} \int_\Omega g(u) dx, & g(u) \in L^1(\Omega), \\ \infty, & \text{その他} \end{cases}$$

ただし、 $g(0) = 0 = \partial g(0)$ とする。(3.1) は (3.2) で与えられる。

$$(3.2) \quad \begin{cases} -\Delta(vv) + \varepsilon \partial g(vv) \ni v, & \text{a.e. in } \Omega, v = 0, & \text{a.e. on } \Gamma, \\ \int_\Omega v^2 dx = R^2. \end{cases}$$

例2. 前例のように Ω, Γ, V, H をとる。正数 K に対して、

$$|\nabla u(x)|_K = \begin{cases} |\nabla u(x)|, & |\nabla u(x)| < K, \\ K, & |\nabla u(x)| \geq K, \end{cases}$$

とおく。 $\varepsilon > 0$ と $\varphi_\varepsilon: H \rightarrow [0, \infty]$ を次式で定義しよう。

$$\varphi_\varepsilon(u) = \begin{cases} \frac{1}{2} \int_\Omega \frac{|\nabla u(x)|^2 dx}{\sqrt{1 + (\varepsilon |\nabla u(x)| \sqrt{2}/\varepsilon)^2}}, & u \in V, \\ \infty, & u \notin V. \end{cases}$$

$\{\varphi_\varepsilon\}_{\varepsilon > 0}$ は仮定 B_2 をみたす凸関数の族であることを示せる。

E_ε^* はこの例では、つぎの (3.3) で与えられる。

$$(3.3) \quad \begin{cases} -\sum_{i=1}^n \left(\frac{1}{2} \right) \frac{\partial}{\partial x_i} \left\{ \left\{ (1 + |\varepsilon \nabla(vv)|^2)^{-1/2} + (1 + |\varepsilon \nabla(vv)|^2)^{-3/2} \right\} \frac{\partial(vv)}{\partial x_i} \right\} = v \\ \quad \quad \quad , \quad |\nabla(vv)(x)| < \sqrt{2}/\varepsilon, \\ -\Delta(vv) = \sqrt{3} v \\ \quad \quad \quad , \quad |\nabla(vv)(x)| > \sqrt{2}/\varepsilon. \end{cases}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} v = 0, \text{ a.e. on } \Gamma, \int_{\Omega} |v|^2 dx = R^2. \end{array} \right.$$

E_0^* は前例(3.2)に対するそれと共通である。

定理2の証明は§5で与える。

§4. 定理1の証明.

A. (1)の証明. $\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}_0}$ が仮定 A_1 をみたす任意の $n \in \mathbb{N}_0$

に対してつぎの(4.1), (4.2), (4.3) がなりたつ.

$$(4.1) \quad \varphi_n(0) = 0, \text{ かつ, } \partial\varphi_n(0) = 0.$$

$$(4.2) \quad \text{任意非負数 } \lambda \text{ に対し, } \varphi_n^{-1}(-\infty, \lambda] \text{ はコンパクトである.}$$

$$(4.3) \quad \lim_{x \in D(\varphi_n), |x| \rightarrow \infty} \varphi_n(x)/|x| = \infty.$$

これより、P. Clément [2] の定理2の帰結として(1)が与えられる。

$\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}_0}$ が仮定 A_2 をみたす場合も同様に(4.1)-(4.3) が成立し、

(1)が得られる。

B. φ_n^* は弱連続関数である. φ_n^* は下半連続ゆえ弱上半連続

であることを示す. $x_m \rightarrow x_0, m \rightarrow \infty$, と仮定する. (4.3) から,

$$R(\partial\varphi) = H, \partial\varphi_n^{-1} \text{ が有界作用素ゆえ, } y_m \in \partial\varphi_n^{-1}(x_m) \text{ があり, } \{y_m\}_{m \in \mathbb{N}}$$

は有界である. φ_n, φ_n^* の間の等式を用いて($z \in D(\varphi_n)$ を固定),

$$\varphi_n(y_m) = (x_m, y_m) - \varphi_n^*(x_m) \leq (x_m, y_m) - (x_m, z) + \varphi_n(z),$$

を得る. (4.2) より $\{y_m\}_{m \in \mathbb{N}}$ は全有界ゆえ、 $\lim_{m \rightarrow \infty} (x_m - x_0, y_m) = 0$ である。

$$\varphi_n^*(x_0) \geq \varphi_n^*(x_m) + (y_m, x_0 - x_m),$$

において両辺の上極限をとり、 $\varphi_n^*(x_0) \geq \limsup_{m \rightarrow \infty} \varphi_n^*(x_m)$, を得る。

C. $\varphi_n \searrow \varphi_0, n \nearrow \infty$, のとき, $\varphi_n^* \nearrow \varphi_0^*, n \nearrow \infty$ である. 前項 B より

1) $D(\varphi_0^*) = H$ である. 任意の $x \in H, \varepsilon > 0$ に対し, $\varphi_0^*(x)$ の定義から, $y \in H$ があり, $\varphi_0^*(x) - \varepsilon < (x, y) - \varphi_0(y)$, である. $y \in D(\varphi_0)$ であるゆえ, $\varphi_n(y) \rightarrow \varphi_0(y), n \rightarrow \infty$. よって, $n_0 \in \mathbb{N}$ があって任意の $n \geq n_0$ に対し $\varphi_0^*(x) - \varepsilon < (x, y) - \varphi_n(y) \leq \varphi_n^*(x)$, である. $\varphi_n \geq \varphi_0$ より $\varphi_n^*(x) \leq \varphi_0^*(x)$ である ($n \in \mathbb{N}$). 正数 ε は任意であるから, $\varphi_0^*(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi_n^*(x)$, である. $\varphi_n \geq \varphi_{n+1}$, ゆえ $\varphi_n^* \leq \varphi_{n+1}^*$ である. ゆえに $\varphi_n^* \nearrow \varphi_0^*, n \nearrow \infty$ である.

C'. $\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}_0}$ が仮定 A_2 をみたすとき, $\varphi_n^* \searrow \varphi_0^*, n \nearrow \infty$ である.

$\varphi_n \leq \varphi_{n+1}$ ゆえ $\varphi_n^* \geq \varphi_{n+1}^* \geq 0$ である. $\psi(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi_n^*(x), x \in H$ とおく. 凸関数 φ_n^* の単調減少列の極限 ψ は又凸関数であり, $\varphi_n^* \searrow \psi, n \nearrow \infty$, である. 前項 C より, 任意の $x \in D(\psi^*)$ に対し, $\varphi_n(x) \nearrow \psi^*(x), n \nearrow \infty$ (φ_n は下半連続ゆえ $\varphi_n^{**} = \varphi_n$ である). $x \notin D(\psi^*)$ について考察する. このとき任意の $m \in \mathbb{N}$ に対し, $x_m \in H$ があり, $m < (x, x_m) - \psi(x_m)$, である. $\psi(x_m) = \lim_{\nu \rightarrow \infty} \varphi_\nu^*(x_m)$ より, $\nu_m \in \mathbb{N}$ があって $m < (x, x_m) - \varphi_{\nu_m}^*(x_m) \leq \varphi_{\nu_m}(x), \nu \geq \nu_m$, である. m は任意であるから, $\varphi_\nu(x) \nearrow \infty, \nu \nearrow \infty$ である. よって, $\psi^* = \varphi_0$ を得る. ゆえに, $\psi^{**} = \varphi_0^*$, である. 凸関数 ψ は弱連続である. 実際, 任意の $x \in H$ で φ_1^* は弱連続ゆえ, x の弱位相による近傍 $U(x)$ があって, $\sup_{U(x) \ni y} |\varphi_1^*(y)| = a < \infty$, ゆえに, $\sup_{U(x) \ni y} |\psi(y)| < a$ である. ゆえに ψ は点 x で弱連続である ([3] 参照). $\psi = \psi^{**}$ ゆえ, $\varphi_n^* \searrow \varphi_0^*, n \nearrow \infty$, が得られた.

D. $C_R^0 = \lim_{n \rightarrow \infty} C_R^n$. 弱コンパクト集合 B^R 上弱連続関数 φ_n^*

が弱連続関数 φ_0^* に単調に収束するから、Diniの定理より、

$$\|\varphi_n^* - \varphi_0^*\|_{B^R} = \sup_{B^R} |\varphi_n^*(x) - \varphi_0^*(x)| \rightarrow 0, n \rightarrow \infty, \text{である. 任意の } \Gamma \in$$

$$\gamma_k^R \text{ に対し, } \inf_{\Gamma} \varphi_0^* + \|\varphi_n^* - \varphi_0^*\|_{B^R} \geq \inf_{\Gamma} \varphi_n^* \geq \inf_{\Gamma} \varphi_0^* - \|\varphi_n^* - \varphi_0^*\|_{B^R},$$

$$\text{である. } \Gamma \in \gamma_k^R \text{ について上限をとれば, } C_R^0 + \|\varphi_n^* - \varphi_0^*\|_{B^R} \geq C_R^n \geq C_R^0$$

$$- \|\varphi_n^* - \varphi_0^*\|_{B^R}, \text{である. } n \rightarrow \infty, \text{として結果 D を得る.}$$

E. (IV) の等式後半が前項 D より示された.

F. $\{\varphi_n\}_{n \in \mathbb{N}}$ についてつぎの (4.4), (4.5) がなりたつ.

$$(4.4) \sup_{n \in \mathbb{N}} \varphi_n(x^n) < +\infty \text{ であれば, } \{x^n\}_{n \in \mathbb{N}} \text{ は収束部分列をもつ.}$$

$$(4.5) \lim_{x^n \in D(\varphi_n), |x^n| \rightarrow \infty} \varphi_n(x^n)/|x^n| = \infty.$$

これらは仮定 A_1 または A_2 より直ちに得られる.

G. (II) の証明. (4.1) の後半の等式より (4.5) が得られる.

$$(4.6) \text{ 任意の } n \in \mathbb{N}, x (\neq 0) \in H \text{ に対し, } \varphi_n^*(x) \neq 0, \text{ である.}$$

E_n^* の第 k 解 $\{v_k^{n_j}, v_k^{n_j}\}$ に対し, $\varphi_{n_j}, \varphi_{n_j}^*$ の間の等式を用いて (4.7) が得られる.

$$(4.7) \varphi_{n_j}^*(v_k^{n_j}) = -\varphi_{n_j}(v_k^{n_j} v_k^{n_j}) + v_k^{n_j} |v_k^{n_j}|^2 = C^{n_j}{}_k.$$

$$(4.6) \text{ より } v_k^{n_j} v_k^{n_j} \neq 0 \text{ ゆえ, (4.7) の両辺を } |v_k^{n_j} v_k^{n_j}| \text{ で割れる.}$$

$$\text{これより, } \varphi_{n_j}(v_k^{n_j} v_k^{n_j}) / |v_k^{n_j} v_k^{n_j}| < R (j \in \mathbb{N}), \text{ である.}$$

$$(4.5) \text{ より, } \{v_k^{n_j} v_k^{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}} \text{ は有界である. ゆえに (4.7) より } \{\varphi_{n_j}(v_k^{n_j} v_k^{n_j})\}_{j \in \mathbb{N}} \text{ は有界である. よって (4.4) より, } \{v_k^{n_j} v_k^{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}} \text{ は}$$

$$\text{収束部分列をもつ. } v_k^{n_{j_q}} v_k^{n_{j_q}} \rightarrow w, v_k^{n_{j_q}} \rightarrow v, q \rightarrow \infty, \text{ とおけ}$$

ば、□項と(4.7)より、 $v \neq 0$ である。 $\{v^{n_j k}\}_{k \in \mathbb{N}}$ はこのとき、収束列である。

H. (III)の残りの証明. $\{v^{n_j k}, v^{n_j k}\}$ は E_n^* の解であるから、
 $v^{n_j k} = (1 + \partial \varphi_{n_j}^{-1})^{-1} (1 + v^{n_j k}) v^{n_j k}$ である。 $j \rightarrow \infty$ とおけば、
 $v^0 = (1 + \partial \varphi_0^{-1})^{-1} (1 + v^0) v^0$ となる。ゆえに $\{v^0, v^0\}$ は E_0^* の解である。(III)の前半の等式を示す。 $\varphi_n^* \searrow \varphi_0^*$ 又は $\varphi_n^* \nearrow \varphi_0^*$ であるから、 $\varphi_0^*(v^0) \leq \liminf_{j \rightarrow \infty} \varphi_{n_j}^*(v^{n_j k})$ である。又、 $v^{n_j k} v^{n_j k} \in \partial \varphi_{n_j}^*(v^{n_j k})$ 、ゆえに、 $\varphi_{n_j}^*(v^0) \geq \varphi_{n_j}^*(v^{n_j k}) + v^{n_j k}(v^{n_j k}, v^0 - v^{n_j k})$ である。 $j \rightarrow \infty$ として極限をとれば、 $\varphi_0^*(v^0) \geq \limsup_{j \rightarrow \infty} \varphi_{n_j}^*(v^{n_j k})$ である。ゆえに、 $\varphi_0^*(v^0) = \lim_{j \rightarrow \infty} \varphi_{n_j}^*(v^{n_j k})$ 、を得て□項より(III)の最初の等号が示された。

§ 5. 定理2の証明. (I)の証明は定理1の(I)の証明と同様におこなう。(III)は(II)の結果と定理1の(III)を用いて直ちに得られる。以下(II)を証明しよう。

A. $\varphi_0^*(x) = \frac{1}{2} (iA^{-1}x, x)_H$, $x \in H$. 実際 φ_0 は $A_1(c)$ をみたすから、任意の $x \in H$ に対し、 $\partial \varphi^*(x) = iA^{-1}x$ があり、 $\varphi_0^*(x) = (iA^{-1}x, x)_H - \varphi_0(iA^{-1}x) = (iA^{-1}x, x)_H / 2$ である。

B. $\mu_1 = \frac{2}{R^2} \sup \{ \varphi_0^*(x) : x \in \partial B^R \}$.

$\mu_k = \frac{2}{R^2} \sup \{ \varphi_0^*(x) : x \in \partial B^R, (x, x_l)_H = 0, 1 \leq l \leq k-1 \}$, $k \geq 2$.

$\{x_l\}_{l \in \mathbb{N}}$ は $\{\mu_l\}_{l \in \mathbb{N}}$ に対応する固有元のつくる正規直交系で

ある。前項 A より B の結果が得られる。

C. $\nu_k^0 = \frac{2}{R^2} \sup_{\gamma_k \ni \Gamma} \inf_{\Gamma \ni x} \varphi_0^*(x)$, $k \in \mathbb{N}$. 実際、方程式、

$$\partial \varphi_0^*(\nu_k^0) = iA^{-1}\nu_k^0 = \nu_k^0 \nu_k^0, \text{ 即ち } \nu_k^0 \text{ との内積を } \nu_k^0, \text{ かつ } C_k^n = \varphi_0^*(\nu_k^n)$$

であることを用いるとよい。

D. $\{\gamma_i\}_{1 \leq i \leq k}$ は、 $(\gamma_i, \gamma_j)_H = R^2 \delta_{ij}$, $1 \leq i, j \leq k$ を満たす任意の系

とする。 $m\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\} = \min\{\varphi_0^*(y) : y = \sum_{i=1}^k \alpha_i \gamma_i, \sum_{i=1}^k |\alpha_i|^2 = 1\}$, とお

く。このとき、 $\mu_k = \frac{2}{R^2} \sup_{\gamma_1, \dots, \gamma_k} m\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\}$, である ($k \in \mathbb{N}$)。

任意の $l \in \mathbb{N}$ に対し、 $z_l \equiv R x_l$, とおく。 $m\{z_1, \dots, z_k\}$ を求める。

$$(5.1) \quad m\{z_1, \dots, z_k\} = \min\{\varphi_0^*(y) : y = \sum_{i=1}^k \alpha_i z_i, \sum_{i=1}^k \alpha_i^2 = 1\}$$

$$= \frac{R^2}{2} \min\{\mu_1 \alpha_1^2 + \dots + \mu_k \alpha_k^2 : \sum_{i=1}^k \alpha_i^2 = 1\}$$

$$= \frac{R^2}{2} \mu_k.$$

$m\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\} \leq m\{z_1, \dots, z_k\}$ を示そう。 $\text{span}\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\} \subseteq \text{span}\{z_1, \dots, z_k\}$

の場合は等号でなりたつ。 $\text{span}\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\} \not\subseteq \text{span}\{z_1, \dots, z_k\}$ の場合

$\text{span}\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\} \cap \{\text{span}\{z_1, \dots, z_k\}\}^\perp \cap \partial B^R \ni w$ が存在する。Bより

$R^2 \mu_k / 2 \geq \varphi_0^*(w)$ となり、一方、 $\varphi_0^*(w) \geq m\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\}$, である。(5.1)より

$m\{z_1, \dots, z_k\} \geq m\{\gamma_1, \dots, \gamma_k\}$, が得られた。

E. $\mu_k \geq \mu_{k+1} > 0$, $\nu_k^0 \geq \nu_{k+1}^0 > 0$, $\nu_k^0 \geq \mu_k$, $k \in \mathbb{N}$. 最初

の不等式は、Bの等式より得る。2番目の不等式は、 C_k^n の定義

より得る。最後の不等式は、C, Dの比較より得られる。

F. 任意の ν_k^0 に対し、 $k' \in \mathbb{N}$ があって、 $\nu_k^0 = \mu_{k'}$ である。

$\{\mu_k\}_{k \in \mathbb{N}}$ に対応する固有ベクトルの系 $\{x_k\}_{k \in \mathbb{N}}$ は H で完全である。

- G. (II) の証明. (i) $\mu_1 = \nu_1^0$. 実際 C, D 項より得られる.
- (ii) μ_1 の重複度が r であれば、 $\nu_1^0 = \nu_r^0$ である。実際に、E 項より、 $\mu_1 = \nu_1^0 \geq \dots \geq \nu_r^0 \geq \mu_r = \mu_1$, となり、 $\nu_1^0 = \nu_r^0$ である。
- (iii) $\nu_r^0 > \nu_{r+1}^0$ である。背理法で示す。 $\nu_r^0 = \nu_{r+1}^0$ であれば $C_1^0 = \dots = C_{r+1}^0$, となり、multiplicity lemma (P.H. Rabinowitz [6]) より、 $K = \{x \in \partial B^R : iA^{-1}x - \nu_1^0 x = 0, \varphi_0^*(x) = \frac{R^2}{2} \nu_1^0\}$ ($\varphi_0^*|_{\partial B^R}$ の臨界値 $R^2 \nu_1^0 / 2$ に対応する臨界点の集合) の genus が $r+1$ 以上となる。一方、 $\nu_1^0 = \mu_1$ であるから、 $K = \partial B^R \cap \text{span}\{x_1, \dots, x_r\}$ で、 $\gamma(K) = r$, となり矛盾である。
- (iv) $\nu_{r+1}^0 = \mu_{r+1}$. 仮定とより、 $\nu_{r+1}^0 > \mu_{r+1}$ とすると、 $\mu_1 = \mu_r > \nu_r^0 > \mu_{r+1}$, であるから、 $\nu_{r+1}^0 \notin \{\mu_k\}_{k \in \mathbb{N}}$, となり F 項に矛盾する。
- (v) $\nu_{r+1}^0 = \mu_{r+1}$ に対して、(i) - (iv) と同様な操作で考察をおこなう。これを逐次繰返す：とて (II) が証明される。

参 考 文 献

- [1] H. Brezis, Operateurs maximaux monotones, North-Holland, 1973.
- [2] P. Clément, Eigenvalue problem for a class of cyclically maximal monotone operators, Math. Res. Center Technical Rep., #1668, Math. Res. Center, Univ. Wisconsin, Madison, Aug., 1976.

- [3] I. Ekeland and R. Temam, *Convex Analysis and Variational Problems*.
North-Holland, 1976.
- [4] U. Mosco, Convergence of convex sets and of solutions of variational
inequalities, *Adv. in math.*, vol. 3, No. 4, 1969.
- [5] 西山明成、非線形固有値問題の近似について、電気通信
大学、電気通信学研究科、情報数理工学専攻、修士論文、昭和53年。
- [6] P. H. Rabinowitz, *Variational methods for nonlinear eigenvalue
problems*, C. I. M. E., Edizioni Cremonese Roma, 1974.